

私立幼稚園と研修

——日私幼全国教研大会の背景にあるもの——

友松 あきみち

一、私幼ということ

先日ある懇談会で教育放送にたずさわっている人の話が出た。

御婦人で非常にテキパキと時宜を得た企画をされてたいへん好評を拍していると言った。私もそのかたとは面識があり仕事の内容にも敬服しているが、「私の知人でNHKにいた時には随分有能な人でしたが、民間放送へうつたらだめになったかたもいますよ。営業方面から苦情が出て左遷されてしまったんですね」私は何気なく言ったのだが、そこにいた公立の先生がたは黙ってしまった。別に皮肉で言ったつもりはないが、ここに私のこれから述べたい一つの主題がある。

やはりその折りのことだったが、ある財団が費用を出して理想的な幼稚園教育がしたいという話が出た。「どなたか園長になる御希望はありませんか」と話の終りは笑い話になったが、ここで私は言いたいことがあった。資金や背景にめぐまれて環境の

よい郊外に理想的な園舎をつくることも結構なことだが、もっと本気で保育界に新風を吹きこむというなら、勤労者の多い、経済的にも、教育機関としても恵まれない地域で思い切った施設をつくってもらいたい。いわゆる名もなき庶民の生きている地域で、その幼稚園が教育的にも信望を博し、町全体の見識を高めていく文化センターをつくることが出来るなら、これも意義のある仕事に違いない。

私立幼稚園は経済的に恵まれた家庭の支持がなければ運営しにくいけれども、私幼人の心の底には、わりにこんなことを考える在野的な気持が強い。教育というものが常に経営にささえられていなければ、健全な発展をみないと同時に、万般の運営には常に当事者の土性骨が必要であることを身をもって知らされている。国公立のかたにはなかなか理解の出来ないことなのだが、私幼の運営は本当に容易なことではない。園の近くに公幼が出来たり、

保育所が出来たり、私立が出来たりすると、そのことがそのまま園の教育内容にまで響いてくるのだ。

この夏青森で開かれた日私幼の全国教研大会は、そのような園の園長や教諭の集まりである。私幼教育の振興とか研修と言っても、これは単に私幼という名を国公幼と置き換えただけの大会ではない。内容も、意味するところも、ある場合には判然と違っているのだと私は思う。

二、私幼研修の実際

昨年の全国大会について本誌に述べておいたことだが、私立幼稚園の教育は近年新しい胎動のきざしを示している。それは教育的な理念からつくり出されたと言うより、経営の現実から求められてきているものだ。それから一年、私立幼稚園の研修は各地域でとみに盛んになった。現場の教師のやることであるから、そうそう目新しい問題にとりくんだり質的にきわ立って向上したわけではないが、研究会での発表が多くなったり、講習会的な集会が数を増していることは事実である。

私立幼稚園の経営にとって教育とか研修という部面が重要な意味を持つようになってきた。一般の父兄も信頼の出来る教師のいる園を選ぶようになった。それゆえ最近には単に運営の術とか、環境の整備ということだけでは世間の支持は得られなくなってき

た。現場の教師も自分の仕事を意義づけるために、ゆとりをもって勉強の出来る園を希望するようになった。減少している有資格の教諭を獲得するためにも経営者の考えは変らざるを得ない。このようなことから各地の私幼の間に保育者の資質向上を期待する声が高まり、実際にそのような研修活動が団体活動の主要な一面にもなってきた。

私幼以外のかたにもおそろくお気づきだと思うが、ここ二、三年にわたって、私立幼稚園の団結はとみに堅くなってきた。それは公幼とか保育所に対処するばかりでなく、私幼教育の拡充改善のために各方面に実際に団体として働きかけねばならない自衛上の必要が起っているからである。組織が充実してくると、逆に団体として教育運営両面に各方面からの依頼や期待、或いは具体的な事業の要請などが生じてくる。このような内外の状況にに応じて団体としては当然組織の確立が行なわれてくるわけだが、日私幼に対する信頼度が高まるに従って全国的な教研大会なども一つの期待のあらわれとして運営されるようになったのである。

私幼の全国組織はしかしまだ充実していない。教研大会なども、都道府県各ブロックの研修が積み重ねられた形で結果されることが理想なのだがまだそこまではいっていない。おそろく本年あたりからようやくその方向に進むのだと思うが、この秋はとりあえず全国を東北・関東・東海・九州の四地区にわけて地区代表

制による参加者八百名の研修大会が予定されている。それに要する費用は二百万円を越えるが、このような団体の研究活動に私幼の組織が積極的になってきたことは数年前には殆んど考えられぬことであつた。国公立のかたからみれば私幼人の歩みは余りにも遅々としていようが、現実的な経営の感覚に支えられながら、それでも徐々に育つてきているこの研修意欲は、やはりそれだけに根強い自力を胚胎しているように私には受けとれる。

三、期待したい学者との提携

全国教研大会が終つたあとで、大会参加の教師たちは幾つかの観光コースに分れてそれぞれに散つていった。私も百名程の一団に加わり静かな山宿に一泊する機会をもつたが、夕食後に現場の若い先生の発言で思いがけず大会の反省会のような懇談会に臨むことができた。幸いに文部省の人や、大会に助言者として参加していたいたた外部の先生がたもおられたので、話は十分科会全部にわたつて和やかなうちにも誠に意義深い一夜であつた。

日私幼の全国大会にはここ数年にわたつて外部から助言者をお招きしたことはない。本年に到つてようやくそれが実現できたのは、団体としてどうやら経済的にも可能になってきたし、何よりも我々私幼人の間に保育者としての自覚が高まってきたので、研修の実を深める意味で特に私幼に理解の深い先生がたをお招きし

て、学問的な助力を得ることになったのである。大会についてその夜の懇談は意見やら希望が続出した。参加者の大方の感想としては一般に研究意欲も向上して、それが各地域での共同研究の成果となつて発表され論議も盛んになり、質的にも参加してよかつたという気持が強かつたようである。おそらく学術的な立場から助言者に来ていただいたということが、それらの討議にもままとまりがついて、参加者には整理がつきやすかつたのではないかともしう。

同様に学者のかたがたにも今日保育の現場で具体的にどんなことが問題になっているか、日本の幼児教育の大勢を占めている私幼の現状とそれにたずさわっている保育者のなみなみならぬ努力が分つていただけたと思う。これからの幼児教育はひとり研究の面ばかりでなく保育の万般にわたつて、現場の保育者と、学者とが一体になつて仕事をしていくことが特に必要になってきたのではないだろうか。

今年の全国大会の傾向はそういう意味で私幼人が現実の経営の立場から保育の問題を一層深く考えるようになり、それをどのようににまとめて結論づけていったらよいか、学術的な裏づけを真面目に考えるようになってきたことであると思う。

*

*

*